

江島弁財天信仰と常磐津節演奏家 —浮世絵〈相州江之嶋弁才天開帳参詣群集之図〉を起点に—

前原 恵美(東京文化財研究所)

初代歌川広重の浮世絵〈相州江之嶋弁才天開帳参詣群集之図〉(弘化 4 (1847)年～嘉永 5(1852)年、東京国立博物館ほか所蔵)は、大勢の女性が列をなして江島弁財天を目指す様子が圧巻だが、彼女たちは揃いの傘の柄から常磐津節、清元節、長唄(杵屋)、富本節の四団体の女性演奏家たちとわかる。似た構図や題材の浮世絵は幕末から明治にかけて制作され続け、常磐津節はじめ三味線音楽の演奏家と江島神社の繋がりを示している。本発表ではまず、これらの浮世絵を紹介しながら江島弁財天と演奏家の関係について整理する。

ところで、一連の江島参詣を題材にした浮世絵でありながら、多くの常磐津節演奏家の芸名が一緒に記されているものが 2 作品ある。〈江嶋大明神大祭参り常磐津女連中〉(二代歌川国輝、明治 2(1869)年、神奈川県立博物館所蔵)と〈東京常磐津総師匠江の嶋参詣の図〉(三代歌川広重、明治 8(1875)年、江島神社所蔵)である。両作品には参詣する常磐津節演奏家の姿だけでなく芸名も記され、後者は男女混じっている。芸名の数は前者が 376 名、後者が 429 名にのぼり、松尾太夫、吾妻太夫、八百八など著名な演奏家名も散見される。これらの情報は個別に取り上げられることはあったが、今回の発表では全貌を見渡して、そこから読み取れる常磐津節演奏家の実態をまとめる。

両作品の制作時期が常磐津節の常磐津派・岸沢派分離時期(万延元(1860)年～明治 15(1882)年)と重なることを鑑みると、制作背景に何らかの意図があった可能性を排除できない。つまり、常磐津派の結束と流派の隆盛を、芸能神である弁財天参詣という構図の中でアピールしようとしたのではあるまいか。

発表では江島神社に現在も残される石灯籠などに刻まれた寄進者の情報も併せ、江島弁財天信仰の実態と常磐津節演奏家の関わりについて考察する。